

雑草でいいじゃない

扶桑畝傍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事帰り

運転してたら

死んでたそうです

神様曰くその世界を助けて欲しいそうで

やる事があるならそれを受け入れる主人公は

なにを考えているのか・・・

目次

貴方は死んでしまいました	1
お米ほしい	9
さあって頑張るか（主に理性が）	15
ヴえ「受付嬢よ」ア、ハイ	24
可愛い動物は・・・	28
責任は・・・取るしかないね。	32
そうだ、魔法で解決出来たじゃん	40
逃走は必然に	47

貴方は死んでしまいました

さて、どうしたのかね？

いや、開口一番失礼。

月は十一月の始め

仕事帰りの運転中だった筈なんだけど

「どこだ？…どこ？」

何時もの道をいつも通りに帰っていた筈

辺りは森に囲まれ

舗装された筈の道路は未舗装となり

灯りは僅かに一軒の家だけ

「つて、

ナビも受信できませんになってるし。」

とりあえず、家の人に聞いてみよう。

車を家の敷地内の空き地へ止め

「すいませくん。」

インターホンが見当たらなかった為

少し大きめの声を出す

『は〜い、ちよつとまって〜』

アレ？知らない言葉？

なのに意味が伝わってる？

『はいはい、つて？』

あれ？貴方は

「まだこちらに來ない筈だったのに？」

なんで？』

ブロロロ

ん？別の車だ

『あ、お父さん帰って來たから、

事情を確認してみましょ？』

え？

『ああ、言葉ね？』

気にしないで喋って頂戴？

「ここは、様々な世界から流れ着く中継点、言葉程度の壁は意味を成さないわ。』
ボタン

『おっ..おや、

もう彼がこちらに来る時だったか。』

「あの、俺は『残念ながら帰せない』」

ああ、予想はしていたけど...

そつかあ、折角仕事も慣れて来て

良い感じになって来た所だったのに

『ふむ、ソレに関しては申し訳ない、

だがなんだ、

ここで立ち話もあれだから

中で話そうか。』

▽

『今一度謝罪と、

送り込む世界についてだ。』

要約すると

1、俺は巻き添え交通事故で

ぺっしやんこされました

2、人間にしては珍しく

生きている内に

“罪の清算が終わりつつあった事”

3、もはや死語の

“チート能力”をあげるから

その世界の安定に力を貸してくれないか？

今ここ→

「まあ、死んじやってますし、

やらして貰える事が

あるんですけど、是非とも。」

『そうか、我々が手を出すと、

また最初からか、
せつかくここまで育った文明を
押し流すしか手立てが無いのでな、
時間が無限に等しく存在する我々でも、
何度も繰り返したくは無いのだよ。』
『それで、

『偶然、交通事故』に
巻き込まれたていで、
貴方を呼び寄せたつて所。』

『あ、コラ。』
ん？偶然に巻き込まれた体（てい）？

『ア、言ツチャツタ。』
「・・・ソウデスカ。」

『あ、あのだね？』
早急にその世界に行つて貰わないと、
君が居た地球にも影響が出てしまうんだ。』
ホウ、ソレハ不味イデスネエ

『ぞ、そこでだね、
3つ程、能力を決めて貰いたいんだけど、
いいかな？』

「3つですか？」
『あ、ああ、君の容量なら3つは行ける、
それと、

アチラの世界に行つて
君に合わせた能力が
世界から付加”される、

従つてその容量も鑑みて、3つなのだよ。』
へえ

「二つ目。」

『人類史の武器、兵器、艦艇、航空兵器の
2020年までの物を最大限使用できる状態で

個人運用出来る能力”

『・・・致し方あるまい、

しかし、その中には“細菌兵器”も？』
「勿論。」

『・・・わかった。』

「二つ目。」

“容姿はこのままで、普通に年を取り、
その世界の輪廻転生の輪に加え

《転生しても記憶の引継ぎ》をする能力”

『記憶か、身体能力はどうするのだね？』

「3つ目。」

“魔法に関しては周辺魔力から使用し、
魔力機関を入れず、身体能力は

《状況の処理特化》に見合う

随時向上の能力”

『しかし、それでは“魔力無し”の
迫害の元になるのだぞ？』

「いいんです、

“そう言う奴”は

そう言う最後を迎えて貰えば。」

(むう、これは人選を誤ったかのう?)

「で、何時向かうのですか？

愛車もこのまま

置いていくしか無いのは解るんですけど。」
『そこは安心せい、

きちんとメンテナンスをさせる、

角も言うワシも車は好きでな、

お主の車、よほど愛着があるのだな、

感心したぞ？』

「そりゃあ、

なけなしの預金通帳をかき集めて、

初めて「自分のお金で」

買った車なんですから、

手放す道理はありません。」

『そうかそうか、

なら時折りここに帰って来い、

その為のカギを渡して置こう、

それを適当な扉で開ければ、

こここの裏口に繋がる、

お主が許した人物であれば

少人数は同行を許そう。』

「ありがとうございます!!」

『して、娘よ、

何時まで黙って・・・おるわな、ソレは。』

「ええ、

真っ先に頂いた能力で

「血管を喰らう

「細菌兵器」が入った注射器を

刺す寸前で止めていたので。」

『だ、だずげで、お、どう、ざん、』

ずるずるに泣き崩れた声で

何時その細菌兵器が自分に刺される恐怖に

もう限界を迎えつつあった

「まあ、お仕置きはこれぐらいにしておきます。」

『そうしてくれ、

ワシにソレを向けないで助かったよ、

反射的に受け返して

キミに刺さっていただろうからね。』

「アハハハ、ヤッパリソウデシタカー。」

『そりやそりや、

伊達に13もの世界を管理している神様を
やってないからねえ。』

「管理職はストレス溜まりますよねえ。」

『わかるかね？』

散々言い聞かせ、メモも取らせ、
契約書も作り、血判書も作らせたのに

出来ないヤツも居れば、余計な事をして

世界を壊しかけたりと、色々あるんだよ。』

「お疲れ様です、神様、

あと一つだけお願いしても良いですか？」

『お願いとな？』

「はい、家族には『異世界で生きている事』を

伝えて欲しいんです、

まあ、会えないけど、生きているからと、

もし、所帯を持つて孫が出来たら

見せに行きたいですからね。」

『ふむ、ソレに関してはワシも考えておこう、

何分ここは『中継点』じゃ、

上手い事繋げれば会えるように出来るやもしれん、

よし、ソレに関しては責任を持って

ワシが何とかしよう。』

「重ね重ね、ありがとうございます、

では、そろそろ向かうべきかと？」

『うむ、

その扉が『繋がっておる』

『シャガ』どんな苦境に立とうとも

耐え凌ぎ新たな芽を芽吹かせ、

素晴らしい花を咲かせる意味を持たせた、

だが、最近は種も芽も出ないのだ。』

「疲弊しているのか、

世界を脅かす何かが

働いていると考えるべきですね。」

『ああ、頼んだぞ。』

「行ってきます。」

『うむ、行ってまいれ。』

▽

『お父さんっ!!』

『なんじや今更?』

『事故の切っ掛けを作ったのは

お父さんなのに、

なんで私が怖い目に逢わなくちやいけないのっ!?!』

『気づいておらんのか?』

『なにを?』

『会って三口目から、違和感なく会話し、

真っ先にワシに “アノ注射器” を

向けようとしたのを。』

『なっ!?!』

『しかし、なにかに気づいたのか

その対象をお前に代えた、

更に（娘さんは大事にし過ぎててもダメですよ?）

などと、 “教えていない念話” で

会話をして来たのだ。』

『念話ってっ!?!』

シヤガの魔法じゃないっ!?!

なんで地球出身の人間が使えるのよっ!?!』

『わからん、

しかし、既に戻す手立てはない、

彼が世界を救うのか亡ぼすのか、

ワシらは、見守る以外に、

手立ては無いんじや。』

『そんな・・・。』

(やして、

あのように底知れぬ憎悪も抱えつつ、

平常心を表にし、

「異常なまでの『警戒心』
罪の清算も進んでいたこの謎、
地球で一体なにが起こっていたのだ？」

お米ほしい

▽

「で、どいん？んいん？」

既に扉は無く

見渡せる範囲全て森林で覆いつくされていた

「さてと、何が食べられる物なのかね？」

この世界に入った瞬間、

ふと頭に浮かんだモノ

“サバイバリスト”

これがこの世界での4つ目の能力

この能力のおかげで食用に適したモノを見分けられ

それを使った調理法が頭に浮かんで来る

火は魔法を使えばたやすく出せるし、

水は・・・多分飲めるであろう水の魔法。

「へえ、 “キクイモ” ねえ、

なにになに？普通に蒸かして食べられる？

大丈夫なのか？」

悪魔でシャガの世界での話で

地球では荒れ地で育ち、

戦後の日本では栽培もとい、

群生していた物が食難、資源不足に大いに役立ち、

食生活が豊かになる連れ姿を消して行つた。

「隣には・・・ガガイモ？なんだこれ？」

効果は・・・強壮と強精・・・まあ、

食べられるならいいか。

「・・・狸の映画で見た事あるな、コレ。」

地球名 “ミツバアケビ”

ワサビ醤油で食べると良いらしいが

「利尿作用がヤバいって、

説明としてどうなんだよ、コレ。」

しかし困った事に

食べれそうな植物はこの三種だけで、
それ以外は「麻薬などの原料に匹敵するモノ」が
混ざっている植物だったのだ。

「キクイモで辛うじて腹は膨れるだろうけど。」

調味料に該当する植物が無い

サバイバリストの能力で

わかる範囲の植物全般が「そう言う原料ばかり」で
「この森自体がヤバイ森って事か。」

カサカサカサと昆虫らしき音はするが

「生憎、昆虫は食べたく無い」てか、

食えるかつ!!

食虫家の方々には申し訳ないが

俺は絶対無理!!

がさがさ

「がさがさ?」

明らか動物サイズの葉が擦れる音だ

ブモ?

「ぶも?」

めとめがあうくしゅんか

「言っている場合かつ!」

突進して来たソレに対して

横っ飛びで回避を試みる

どずん、鈍い音が樹木に響き

その樹木が

メキメキと音を立てて倒れて行く

「うわあ〜お。」

目測2〜3mはあろう樹木を突進一つで倒せる

イノシシらしきヤツは、

向きを俺に合わせ直し

ブモオ〜ツ!!

突っ込んで来る

「ちいっ!!」

咄嗟に呼び出したのは

『地面に突き刺して使う』タワーシールド

ゴガアアン

タワーシールドはへしやげる事無く耐えきった

「・・・くう、しびれた。」

失敗だ、両腕が振動と衝撃で痺れてしまった

しかし

「あれ？追撃が来ない？」

タワーシールドから離れ

追突したのであろうイノシシモドキを確認すると

「うげえ・・・頭が破裂してやがる。」

恐らく突進の力と

『魔法』で何らかの効果があり

あの樹木を破壊、倒したように

このタワーシールドも行けると判断したのだろうか

「悪かったな、樹木じゃなくて。」

モノ言わぬイノシシモドキに合掌をする

「・・・だよなあ。」

頭に浮かぶは、

イノシシモドキの食事の仕方

「・・・仕方がない、

うっ、食べるにも、ヤルしかない。」

一つ目の能力で、

『ナイフを幾つか準備する』

ビリビリ!!

すぱっ、すぱっ、すぱっ

ごりごりごり・・・

少し離れて

ウエえ・・・

頭に浮かぶやり方を身体に覚えさせながら
解体を進める

「はあく．．．なんとかここまで出来た。」
食べれる部位は、

足、腹周りの肉、心臓だけで、

胃袋は、水筒の元になるらしく

「乾燥させ、ギルドに納品すると」

10銅貨＝10円になるそうだ

「．．．それ以外は、

人間にはよくない物がある、

火種か、土中に埋葬しかない、か。」

先ほどのキクイモを少しと、

足、腹周りの肉、心臓を、

イノシシモドキの皮で包み、

手提げ風味に持ち上げ

胃袋は、背中に担いだ

「．．．重い。」

と言つても、三つ目の能力のおかげで

だんだんと軽く感じられるようになってきた

「なるほど．．．。」

負荷を掛けなければただの一般人のままか

「鍛えろって事かあ、

苦手なんだよなあ、そう言うの。」

本当に苦手だった

努力は報われるなんて「戯言」を信じる奴は

努力に裏切られ続けた人間を

知らないから言えるんだろうねえ

イノシシモドキの血でべちゃべちゃなので

どうにかして服やら身体を洗いたい

「．．．ってか、水の魔法で洗い流せるんじゃないやね？」

ついつい、ここが

「異世界・シヤガ」だと忘れてしまう

この世界では詠唱の必要が無く

イメージをより明確にする為に詠唱をする

「水の魔法により、

付着した汚れと血液を洗い流し、

火の魔法で周辺気体を温め

風魔法にて衣服を乾燥させる。」

結論

「温水って言っとけばよかったな。」

冷水って比では無いぐらい冷たい水で洗い流され

温い風魔法によって辛うじて無事だった

「ま、コツさえ掴めば万能だわな。」

イメージさえしつかりしていれば

一戸建てモドキ（平屋）も

魔法で工程をすっ飛ばして建築できる

「うし、とりあえずメシ。」

キッチン魔法による「IH」

灯りはイノシシモドキの「一部」を使った

ランタンで4つ程

薄暗いが、無いより全然マシだった

油を使用するランタンは

それを投げつけると火炎瓶モドキになる為

「武器扱いのが幸いだった」

じゅうじゅうと焼ける

しかし、調味料が無い

「素でどんな味なのかね？」

キクイモとイノシシモドキのステーキ

キクイモも一緒に焼いて見たのだが

「……いい、いただきます。」

あむ

「おっ？」

ああ、調味料は必要無いのかもしれない
キクイモが甘くしっとりしていたのだ

「んじやステーキはどうだろ？」

もぎゆ

「・・・やべえ、米が喰いてえ。」

お米欲しさにガチ泣きしてしまった

「胃袋は、そのままぶら下げて三日で乾燥するから

三日はここが拠点だな。」

さあつて頑張るか（主に理性が）

▽

くんくん

うわあ!!すごい良い匂い!!

こんな「死の森」に捨てられたから

死ぬしかないって思ってたけど

「神様はきつと居るんだね!!」

私はその匂いに釣られて

「森林の奥深くへ入り込んでしまった」

後ろから魔物が着いて来てるのも気づかずに

▽

ふう、とりあえず落ち着いたな

イノシシモドキの足で一食はキツイから、

もう一頭は狩る必要があるな

「・・・そっか、武器があった。」

早くこのシャガに慣れねば

「うし、これで頭を狙えば・・・。」

人？

（いや、オマケも居る）

窓から外を見ると

低木の影に小柄な人影が一つと

明らかデカいとわかる何か後ろから迫って来ていた

「ふざけんな！」

俺の拠点をやらせはしないっ!!」

▽

（はあくなんて良い匂いなんだろう）

ここ何日も食べて無いから

よだれとかでないと思っただのに

じゅる

「おととと。」

破けた袖で口を拭う

ぐうぐ

早く食べたいなく

ズシン

「え?」

この揺れで

私は「捕食対象」になっていた事に気づいた

▽

鈍い音と共に小柄な人影が殴り飛ばされた

「っ!」

構えるのはマテバロングバレルカスタム

ガス銃でカスタマイズした事があるからこそ

「実銃でのカスタマイズ武器も呼び出せる事」に

気が付いたのだ

「当たってくれよっ!!」

ガオン

勿論、初めて実銃を撃つ行為は

掠りこそすれど脳天は貫けなかった

「うひゝ、これもしびれるゝ。」

しかしそのオマケは

俺を脅威対象と認識してくれたようで

怒りの表情（たぶん）で迫って来た

「こっちだっ!!」

先ほどイノシシモドキの

食べれない部分を埋めた方へ誘導する

そして、また魔法が使える事を忘れていた

「っ!!」

ガオン

動きを鈍くさせる定番として足を撃つ

今度は膝らしき部分を見事貫き

オマケは倒れ込む

グボウウウウ

「どう言う叫び声だよっ!!」

起き上がられてはたまらないので

反対の膝も撃ち貫く

ガオン

これで三発、後、三発

まだ、魔法が使える事を思い出せないでいた

腕も肩目掛け撃ち込み

後、一発

「・・・あれ?」

「ここで漸く『魔法が使える事』を思い出した

「はあく・・・。」

盛大な溜息を付きながらしやがみ込む

(なにやっつてんだろ、

どうして魔法が使える事を忘れるんだ?

ここは地球じゃないんだぞ?)

ウゴウゴ五月蠅いオマケ

「うっせえ・・・。」

まだウゴウゴ言っている

「うっせえつてんだろうがっ!!」

弾丸に魔力を込めるイメージをし

弾着と同時に『爆発するイメージ』を

更に捻じ込んで

「ぶっちれっ!!」

頭を撃ち貫いた

ガオン

ボジュツ!!

あ、上半身が焼失しちゃった

「やべっ、さっきの人影。」

慌てて来た道に戻る

▽

(・・・いたい)

辺りが赤くみえる

「・・・え。」

声もうまく出せない

(・・・血、

ああ、私の血だ・・・

私、シンジャウヨ・・・

やだよ・・・シニタクナイヨオ)

「いたっ!!」

だれだろう？おとこの人のこえ？

　　〃闇の魔法にて損傷部を除去

光の魔法にて損傷部の復元、

俺の血液から血清を製錬、

この者の不足分血液を

俺の血液から変換し補填

その不足分は所持している

イノシシモドキの血肉を製錬し補填

発動!!”

(んな無茶苦茶な魔法・・・

出来る筈がないのに・・・)

▽

?

「よう、目、覚めたか？」

「・・・こ、は？」

「俺の拠点、

んで、三日間眠り姫の気分は？」

三日も寝てた？

私が？

「・・・て、るっ..」

「あ？」

ああ、生きてる。」

あくあ、泣き出しちゃった

「ほれ、起きろ、

イノシシモドキの肉のスープだ、

いきなり固形物食べると

帰って胃に血が集中して

貧血起こすからな、

ゆっくり飲みな。」

あたたかい

おいしい

ん？

なんだか服が・・・!?

「ん？

先に謝る、

傷の手当と、

服がボロボロ過ぎてな、

俺が作った衣服を着せた、

悪かった。」

はたかれる覚悟で頭を下げる

あれ？

「どうした？」

「こんな高級生地のは着れませんっ!!」

「そっちなよ!!」

恐らくこのシャガでは綿が衣服の主流と判断したが

まさかの高級生地だったのか、一つ学習したな

「そ、それに・・・なんだか、

その・・・。」

「あく、なんだ、

寝てる間でも・・・その、

な？だからさ・・・あのく。」

まあ、でるよね？

解るよね？オムツを付けとききました

だって動かすには不味いぐらい
ボキボキに折れてたし、

破けた・・・ね？少し、中身が出かかってたし、
身体への負担を減らす為にも

オムツを選択したのは

間違いない!!多分!!

「・・・に、ん。」

「はい？」

「責任、とって下さい。」

まあ、スープを会話の間に挟みながら
状況の説明を続けた

▽

「ごめんなさい!!」

拠点滞在5日目

彼女から改めて謝罪を受け、
とりあえず落ち着いた

「わかって貰えて良かったよ、

それで、この先はどうでしょうか？

先の説明通り、

俺はギルドに向かいそこの

イノシシモドキの胃袋を換金したい。」

彼女が寝ている間も

イノシシモドキの狩りは続け

スープを作り少しずつ飲ませていた

だからこそ「栄養不足で死ぬ事は無かった」

狩りを続けた結果、

胃袋は6個獲得し

燻製の方法を試したら

「20日は持つ保存食」も確保できた

「でも、私もここが死の森って名前以外
場所もよくわからないのよ。」

そうなのだ、彼女は

別の国の貴族だったのだが、

「魔力無し」の烙印を押され

ここに捨てられたのだ

「ふむ、

・・・なあ？

この世界には「魔力無し」はあり得ないって話だったよな？」

「言い伝えだけよ、

現に私が使えないし、

こうして捨てられた子供も

たくさん居るとも言われているわ。」

（・・・使えないのでは無く

使わずとも「別な何かに頼れるか使えるか」

無意識化による封印がド定番だけど

そっち系統の能力は頼まなかったからなく

「まあ、仕方ないか、

名前もないんだろ？」

「・・・メルジエーネ。」

「メルジエーネ？」

「私の名前、メルジエーネ・フォン・ルーカフィル。」

「そか、

んじや、俺の養子にならないか？」

「は？」

「いや、家名でまたそう言う迫害やら、

捨てたルーカフィル家からまた命を狙われるんだぞ？」

そう言うと、顔を伏せ

「わ、ってる。」

泣き出した

「・・・メネ。」

「っ!?!どうしてお母様が呼んでだ略称をっ!?!」

「おっと、そうなのか、

だけどこの「メネ」は、

そのお母様以外は？」

「絶対知らない筈よ、

だってお母様の娘は私だけで、

お兄様はお父様にべったりだったから。」

「なら、それで行こう。」

「どう言う事？」

「俺の名前、

仁淀（によど）五十六（いそろく）、

古臭い名前だけど、

メネは、「メネ・ニヨド」として

そのお母様に会えるんじゃないのか？」

「・・・あなた、

いま、なんて言ったの？」

「え？ニヨド・イソロクだけど？」

「・・・大犯罪者にして大英雄のイソロク、

この世界に10年の平穏をもたらした

最初で最後の人間の名前よ。」

「・・・その人は生きてるの？」

「死んだわ、

もう200年も前に。」

「あん？なんで200年前の事が

今も伝わってるんだ？」

「・・・小競り合いこそ続いている今だけど、

その200年前はもっと酷かったらしいの、

それこそ世界中で戦い続けてたって、

家庭教師の先生が言ったの。」

「それを10年も止めたのが、イソロクって人か。」

「そうよ、

でも英雄であり犯罪者、

その当時、誰もが追い求め、
手に入れようとした

“13の聖杯”を

根こそぎ奪って、

その“13の聖杯の力を”

《使い切って10年の平穩》を創り出したのよ。」

「……その聖杯に力は戻るのか？」

「……わからない、

その部分を教わる前に捨てられたから。」

「すまん。」

「いいのよ、

でも、イソロクの名前、

良い意味でも、悪い意味でも、

“注目を浴びるのは確実ね”

「メネ、先ずはこの武器に慣れてくれ。」

持ち出すのは“三八式歩兵銃”

「なにこれ？」

「まあ、そうなるか。」

要点を説明すると、

“俺よか素早くリロードし”

命中率も言わずもがな、

俺より確実に当ててくれた

……泣きたい

ヴえ 「受付嬢よ」ア、ハイ

▽

「一カ月も行き来すれば慣れるか。」

「そうね。」

以外にも徒歩圏内に

“ギルドを中心とした街があり”

いとも簡単にギルド員として登録できた

丁度、水筒の材料の胃袋が

品薄で順次納品待ちだった事もあり、

一袋≡1銀貨≡100円で

引き取って貰え、10個納品した

▽

「しかし、高騰してるなあ。」

「仕方ないのよ、

紛争、小競り合いと言う名の国家間戦争、

殺し合ったって、

互いを苦しめるだけなのに。」

「ま、わかってても

互いに譲れないモノがあるから、

そう言う手に頼っちゃうんだよな。」

調味料が無いのでは無く、

その原産国同士で戦争をしているので、

そもそもの輸入が出来る状態では無かったそうだ

この地域では既に採りつくされ

“死の森”で僅かにあるかどうかまで

減ってしまった為、今は採取禁止にされている

「とりあえず・・・。」

メネを抱えて “ギルドの裏口に隠れる”

(ちよつ!?!:(ニニ)／／)

こんなトコでスルのっ!?)

(あほ、

尾行だ、最近水筒の高騰があっただろ?)

(うん、丁度南方と西方で・・・あ)

(ああ、どちらかの間者だ、

見つかるのは不味いな、

メネと俺は魔力無し、

そんな奴らが、どうして

胃袋の納品が出来るのか探りに来てるんだろう)

「お二人共、こちらへ。」

「受付・・・。」

口元でしーっと、人差し指で口を押える

ちよつと茶目つ気の在る受付嬢さんが

招き入れてくれた。

▽

「やはり来ましたね。」

「予想よりは遅い気もしますが、

まあ、良しとしましょう。」

「え?ふたりして何の話?」

「あら?言つてなかったんですか?」

「え?まあ、その、

ねえ、〃女の子にはキツイ話〃も

あるからさ。」

びくつて、あくあ、

メネ震えてる、だから言いたくなかったのに

「ほれ、おいで。」

ぎゅつと抱きしめ、

頭をぽんぽんする

「ごめんな、メネ、

怖いだろうって思つて

話さなかつた俺が悪いな。」

「い・・・いめ、さー、

でも、きぎ、聞くわ。」

「優しい旦那様ね。」

「ぶっ!? まっ!? まだそんな関係じゃっ!?」

「あら? 違ったの?」

「ヴェノム」さん?

からかうのは程々にして下さい、

それに貴女にもそう言う輩が

着いて来てもおかしく無い、

そうですね?」

「はあ、そうね、

ようやくと安住の地に住めたと思ったのに、

あくあ、また戦場に逆戻りは嫌なのよね。」

この受付嬢さんこと、ヴェノムさんは、

戦場で出会ったら逃げろと言われる、

生ける戦神クラスの実力者であり、

本当に憧れの受付嬢をしたいが為に

「戦場から逃走を繰り返す戦神」でもある

「兎に角、問者は私が始末するから、

むしろあなた達は、普段通りに行動して欲しいのよ。」

「ちよ、ヴェ 「受付嬢よ?」

受付嬢さんは、それで大丈夫なんですか?」

「メネ、わかってるだろ?」

「このギルド員で誰もヴェ 「受付嬢。」

受付嬢さんに敵う人が居ないのは。」

「そうだけど。」

「ちよつとごめんなさい。」

(ちっ、メネ!)

「わっ!?!」

メネをしつかり抱え

「これから起こるであろう事を見せない用にする」

▽

ヴえ「受付嬢」受付嬢さんは、

胸元の羽ペンを手に持ち

天井の僅かなスキマに「投てき」した
ぐああっ!?

誰かの叫び声だ

「あ、そうそう、

その羽ペン、私の特別性だから。」

返事はその苦痛と絞り出すような声で帰って来る

「な・・・ぜ

「毒蛇」がつ!？」

そして、その間者は身体中から血液を吹き出し

息絶えた

「つたく、

また天井の張り直しと、

床の張替えじゃないの、

そんなに予算は潤沢じゃないのに、もう。」

ふんすか、そう言う表現が合う

愛くるしいポーズをしている筈なのに

「滴る血液を美味しそうに嘗め回す仕草は」

妖艶、興奮を覚える輩が幾人か出るだろう

「受付嬢さん、

せめてメネが見ない様に処理出来ませんか？」

ガタガタと震えるメネをしっかりと押さえ

カウンター側に通じる扉へ移動する

「出来たらこんな事しないわよ、

でも、この「味」

西方ね、よりにもよって古巣からかあ。」

受付嬢さん曰く

血の味で、どこ出身の人間かわかるそうだ

可愛い動物は・・・

▽※

何かあつたら家に居候するから宣言され
ギルドから出る

「メネ、帰ろう。」

小さな声で「ウン」と返事が来る
確かにイノシシモドキの魔物や、
ワールドゴブリンなどは倒せるが

“人は無理”

メネはまだまだ少女なのだ、
背丈で言えば小学生3〜5年生だろうか？
年齢も、6〜9らしい、

このシヤガでは、日時計ぐらいしか無く、
年数の数え方も結構アバウト、
先の200年前のそこまでは

“時計と時刻、暦、一年の数えが”
しつかりしていたが、その後の大戦により、
崩壊、どの国も基準が曖昧になって行った。

▽

「ほれ、今日は茹で卵と、

山菜スープ、イノシシモドキのから揚げだ。」

悲しい事に米が無い!!
どうして!!どうして!!

米が無いんだよおおおっ!!
少し硬くなったパンをスープに漬け、
柔らかくして食べだす。

モクモク

メネはリス食いタイプで、
本当にゆっくり食べる

ま、俺もつられてゆっくり食べるようになった

「ねえ、イソロク。」

「ん？」

次の言葉が出るには、

そのモクモクした口が止まるまで出てこない

「・・・んくう、

やっぱり、戦争、行くの？」

ああ、このゆっくり動作に癒されるく・・・ん？

「誰が戦争に行くって？」

「イソロク。」

俺が？

「行かないよ、少なくとも、

メネが人質にでも取られない限りはね。」

・・・はて？

俺はまあ、無意識口説き文句を言ったようだ

メネは真つ赤になり

「アリアト／＼／＼」

・・・沈まれ、俺の理性、

ダメだ、いくら何でも駄目だ。

「昼間の事で、そう感じたか。」

「うんう？」

「食べるか話すか、

どちらかにしなさい。」

「うんう。」

モクモクと食べ進めるメネ

「ちよ、ちよつとごめん。」

「んうう？んうう？」

(なあに？トイレ？)

「いや、外にまたうろついてるから

ついでに明日の朝飯確保してくる。」

「んうううう。」

(いってら〜)

▽

だあああああああつ!!

つぶねええええつ!!

拠点（平屋）には、

俺特性の防御用魔法と

“セントリーガンを幾つか設置してある”

ヴえ「受付嬢」受付嬢さんと、

メネ、俺は、ICタグを首に下げている為

“ターゲットにはならないが”

それ以外は“人間だろうと撃つ用にしてある”

「つて事で、

憂さ晴らしに付き合えやごらああつ!!」

最近、戦争の範囲が広がったせいで

この辺に居なかった魔物が増えてきている

そのせいでバランスが崩れ出していた

▽

「オオカミモドキと、

ラクダモドキが2頭ずつか。」

この二種は、食用では無いが、

ラクダモドキは背中のコブが納品アイテムで、

絵画に使われる色を調合するのに使われる。

オオカミモドキの方は

歯と、二つある胃袋だ、

歯は矢じりとして加工され、

胃袋は、プレートアーマーの

ヘルメット内部の皮部品として重宝されている。

戻り際に、ウサギモドキが襲い掛かって来たので

首を切り落とし素早く“2本の角を折る”

このウサギモドキ、

この“角がある限り不死身”で、

対処法はこの方法以外無いとか、

結構ヤバい奴であり、

ギルド員も年に数名犠牲者が出るほどにヤバい

その修復、復元能力は尋常でない程早く、

その虚を突かれ

“生きたまま捕食された人間は数知れず”

「そのもも肉が一番の美味しい所とか、

洒落になってねえよ。」

食用可。

責任は・・・取るしかないね。

「さて、

どう言う事か

説明して貰いましょうか？

ヴェノムさん？」

「え〜つと・・・だめ？」

ちよつと遡ると←

とある戦場

「魔法が飛んで来るぞ!!」

「防御魔法はっ!?!」

「魔術師がやられたぞっ!!」

「くそっ、

こんな時

▽ 「毒蛇」はどこに行ったんだっ!!」

▽

(あくあ、

気になって様子を見に来たら

案の定攻め込まれてるし、

押され気味だし・・・)

「・・・はあ。」

渋々足に力を籠め立ち上がる

「すこお〜しだけ、殺るかなあく。」

▽

これが原因で

ある子を見つけ

「お持ち帰りしてしまったのだ」

で、今←

▽

「あの・・・。」

「まあ、しかたがない、

メネも抱えているし

今更養うのが一人二人増えた所で

騒いでもしようがない、

名前が・・・えつと、

自己紹介して貰っていいかい？」

「あ、はい、

メイリーン・フォン・アシガラ

西の国の元貴族の次女です。」

(あん？アシガラ？)

足柄って、あの足柄？)

「もしかして

海か山に由来する？」

「え？はい、

足柄山のアシガラです、

どうしてご存知でなのでしょう？」

「あれ？によつちに教えたっけ？」

(あ、つい)

「多少は知ってたただだよ、

それでね？

セントリーガンの代償なんだけど、

「幾ら」がいいかな？」

「っ!?!・・・お、おいくら？」

正直、アレを出すだけなら

なんら支障は無かったのだが、

「維持」は別物で、

弾薬を精製する物質は、

「ギルドを介して輸入して貰っている」

確かに能力によって

万全の状態で使えるが

それつきりなのだ、

補給、修理に使う資材は自己調達
再度「呼び出せば」良いのかもしれないが
設定なりIDタグを新たに必要とし、
かなり面倒くさいのだ。

「・・・金貨8枚かな。」

あ、凹んでる。

「むっ!?むりよおっ!?

そんなお金貯めてないもんっ!!」

あゝ、かなりテンパってる

ヴェノムさん、テンパると、

語尾に「もん」が付きます。

「ミオ姉さまっ!?!」

あ、そうそう、

ヴェノムさんは

ミジカオヘビ・ラー・ヴェノムって言う

メイリンと同じ、西の国の

「元王族の長女」

正当な第一王女後継者だったのだ。

「メイリンっ!?!」

イソロクがイジメて来るっ!?!」

うわゝ、長身の女性が

メネとあまり変わらない少女に

泣きついてるし

「みっ!?!ミオ姉さまっ!?!」

こんな場所では嫌です!

ちゃんと「寝所」でなら／／／

おい、なに口走ってるんだこの幼女は?

「め、メイリン、

だって、ひと月振りなんですもん、

成長していくメイリンを

隅々まで私が見れ」すばん!!

「おすわり。」

「え？」

「おすわりっ!!」

「はいっ!!」

あ、正座はあるんだ。

メネは・・・あ、気絶してた

「ヴェノムさん？」

メネはいたって普通の少女です、

メイリーンとの関係は

咎める立場では無いにしても、

メネを巻き込むのは許しません、

それに貯蓄の金額も聞いてませんし

今後のやる事も

決めないといけませんね？」

更に無言の笑顔で圧力をかける。

「そ、ソウダスネ。」

「ミオ姉さま。」

「さて、実際いくら貯めているんですか？」

あれ？

「ミオ姉さま？」

ちゃんとお約束しましたよね？

ひと月に金一枚か、銀一枚を

「ちゃんと貯蓄する」と、

私（わたくし）が遊びに行く時用に

きちんと貯めて置くと、

「名言と純潔」を「すぱん

「痛いですっ!?!」

「・・・メイリーン？」

キミ、いま幾つ?」

「・・・確か、先月で11才でしたっけ？」

「メイリーン、10の間違いよ?」

「そうでしたか？」

「そうよ。」

メネを一番頑丈な部屋のベッドに寝かしつけ
ぱたん

かちや

鍵を閉めた

「あ、あの、イソロクさま？」

「メイリーン、キミは

西の国での成人は幾つか知っているかい？」

「・・・すみません、

家庭教師からまだ教わっていません。」

「ヴェノムさん？」

「ハイ!!」

「成人は幾つですか？」

「エツト、ソノ。」

「まさか・・・ミオ姉さま？」

「・・・14です、はい。」

「さくって、

王様に売ったら幾らかなー。」

「そうですねー、

ミオ姉さまですから、

しかも第一王女様ですからねー。」

「アウアウアウアウ・・・。」

はあ

「ヴェノムさん？」

責任はちゃんと取りましようね？」

「ハイ。」

「あら？売らないので？」

結構怒ってらっしゃる

「仮にそうしたら、

国のしがらみに巻き込まれるし

「戦神」と「元貴族の次女」が行方不明だとしても、

大きな問題にはならないでしょうし。」

「え？どうしてでしょうか？」

「昨日のギルド回覧板を見たからさ。」

《戦神がまた行方不明！

魔力無しの貴族次女が

森林入口で死亡

魔物に襲われたか？》

「つて、回って来てたからな。」

「・・・そう、でしたか。」

「メネと同じ境遇だ、

当面はここを使って良いけど

俺達は距離のある依頼も受けるんだ

往復に7日8日は掛かる物もある、

メイリオンには、

早急に自力（じりよく）を

あげて貰わなきゃならない。」

「では、ミオ姉さま？

責任、きちんと取って下さいまし？」

「ハイ。」

「ギルド登録も・・・そうだな、

俺の名前でいいだろ、

「リフラ・ニヨド」な？

この家の中ならメイリオンだけど、

一歩外では「リフラ」と

名乗って欲しい。」

「安直すぎではないでしょうか？」

「うるへー、

それにヴェノムさん？

貴女も受付嬢としての仕事は

「続けるには苦しいでしょ？」

「痛い所を・・・」

「なら、貴方の名前を頂戴よ？」

「ミラム・ニヨド」な、

拒否権は無し。」

「わかってるわよ、

で？メネちゃんはイソロクの

なんなの？」

かちや

あれ？なんで鍵が開くの？

「メネ、イソロクならいいよ？」

「・・・ちよつと、外に行つて来る、

メネ、鍋に水を沸かしてくれ、

イノシシモドキの鍋にするから。」

有無を言わさず外にでて、鍵をかける。

▽

あく、まじで理性が崩壊する所だった。

てか、メネ、

あんな色っぽい顔出来たんだ・・・

・・・はあ、平均成人年齢を15として、

後最低4年か

「持つかな、理性。」

って考えながら

6頭目のイノシシモドキを狩り終える

「ただいまー。」

今では10頭引ききずつても

疲れない身体になった

つまり、性欲もパワーアップする訳で

「・・・メネ、怒られる前に

ちゃんと服を着なさい、

成人したら責任取るから、

それまではお預け。」

「・・・はあゝい。」

でも、ウレシ／＼／

「で、そつちの二人は？」

「料理出来ません。」

「・・・皿ぐらい並べてくれ。」

そうだ、魔法で解決出来たじゃん

「あ、おはよ。」

「おあよ。」

メネの寝起きは良くない方で

今日みたいに同じ時間帯で

顔を合わせるのには数える程度だ

リフラ・ニヨド

ミラム・ニヨド

この二人はギルドへ登録に行っており

朝から居ない

一昨日ネグリジエを着たメネは

反動からか露出が少ない服装に

切り替わっていた

「珍しいな、

こんな時間で起きるなんて。」

「わかんなあ。」

まあ、欠伸をしながら返事をする、

その仕草もどこから滲み出すのか

「外見年齢」と反する

「色気」が溢れ出す

「てい。」

左手にナイフを刺し

メネからは隠す

「今日はどうする？」

「ん、すいとん。」

「りよ、かい。」

幸い「米」が無くても

「小麦粉」があった

どこかの「芸人」は

「ちねる」とか言って

米モドキにしていたが

そこままでして米モドキを作りたく無い

イノシシモドキの肉を出汁に使い

市場で仕入れた『高騰中の砂糖』と

『更に高騰中の塩を少々』

で、甘しよっぱいすいとんの元を作る

「裏の畑から、野菜を頼む。」

「あゝい。」

まだ眠いのか、

あちこちぶつかる音がする

(大丈夫かな?)

火加減に気よ付けつつ

すいとんを投入し、

しっかり茹でる

串で火の入り加減を確認しながら

「そろそろ出来るぞ〜。」

「おくも〜い〜。」

(ん?裏の畑で

重い物って言ったら・・・)

「メネ、

大ダイコンは、

すいとんを作る前に持ってくるか

『そこに干してる』だろ?」

「・・・あ。」

ま、それは予測済みで

ちゃんと一緒に鍋に入って

程よく煮えている。

「メネ、

その大ダイコンは、

刻んでそっちの漬物と交換してくれ、

よそっておくからさ。」

「うん、わかった。」

気に入っているのか

イチヨウ切りでダイコンを切り分け、
糠漬けのツボの中身を入れ替える

「むふ／＼／＼」

(あ、つまみ食いしたな?)

ほっぺがしっかり膨らんで

こりこりと、噛む音が聞こえる

「メネ〜?」

いただきますをする前に

食べないでって

俺、言ったよね?」

ごくん

「あ。」

つつかえた

湧き水を貯めている水瓶から

コップにすくい、受け渡す

「んく、んく、んく、

んくはあ〜・・・

「ごめんなさい。」

「さ、先に食べてて。」

外に飛び出し

運の悪いラクダモドキに

八つ当たりする

「うおおおおおっ!!」

(なんっ)

エロさなんだよおおおっ!!)

メネは推定10歳なんだぞっ!!

理性よ!!鋼の如き強靭さを

今ここに示せ〜っ!!

「推定?ん?」

なにか忘れていているような気がするが、
とりあえず朝飯だ。

「まっつた。」

「あゝ、冷めちゃってる?」

「だいじよぶ。」

「お、ほんとだ、

・・・あ、保温の魔法を

お椀に付与してたんだった。」

かれこれ2カ月以上は過ごしているのに、

未だに“魔法が使える事”を

忘れてしまう

▽

「・・・あつ!!」

朝食を終え食器を洗っていて

「そうだ、魔法で解決できるじゃん。」

「なにが?」

首をこてんと傾けながら

こつち向かないで?

理性がごりごり削れていくからさ

「メネのちゃんとした年齢だよ、

俺の知識から

メネの産まれた時からの

日数をソレに当てはめる

計算をすればよかつたんだよ。」

「・・・なんか、やだ。」

「それじゃあ何時まで経っても

“成人”を迎えられないよ?」

「それもやだ。」

「メネ?」

「むゝ。」

ああ、可愛い

抱きしめたい

だが、それはいけない

駄目だ、

メネがもし見た目通りの年齢なら

「じゃあ、

俺とメネだけの秘密にしよう。」

「・・・わかった。」

二人の気配は・・・無い

▽

気不味い

ええ、判明しましたよ

地球で言う

4年周期の閏年（うるうどし）と

365日計算で

年齢を計算し当てはめるって、

魔法を使いましたよ

「・・・メネ、

成人してたんだな。」

「・・・うん。」

しかも種族が関わっており

それも魔法を使い

種族毎の特徴もわかってしまった。

【半妖精族】

人族から一定の割合で

“幼少期のまま老化が止まる”

魔法は使えないが

精霊・妖精から助力を得る事が可能

実質、魔法で出来ない事が

出来るようになる

寿命は、最低100年〜1500年とも

精霊・妖精との相性にもより

この世界のどこかには
3000年も「幼少期のまま」
生きているとか

尚・成人は地球換算で15歳

「だ、そうだ。」

「・・・責任、とつてくれる?」

「はい、わかってます。」

▽

「へ〜。」

「メネさん、半妖精族だったんですね。」

リフラもミラムも

半妖精族を知っており

俺の一般常識不足が良く分かった

午後、帰って来た二人も

年齢を確認するかと聞いたたら

「ぜひ!」

あれ? 普通は嫌がるんじゃないの?

「え? は?」

うそだろ?

どう言う事だつてば?

「リフラ?」

本当に言っても良いのか?」

「当然です、

屋敷からほぼ出ていませんでしたが、

淑女として

自身の年齢もきちんと把握しませんと。」

▽

あく、もうわかるよね?

ミラムが16歳（人族）で

リフラが、112歳（半妖精族）

いい加減過ぎるだろ、この世界

「お、お姉ちゃん？」

「み、ミラムちゃん？」

二週間程、ギクシヤクが続いた

逃走は必然に

「ふい、オオカミモドキ

依頼の15頭完了。」

「お腹空いた。」

「そうだな、

持ってきたサンドイッチ食べるか。」

討伐証拠の

尻尾を切り取り腰に束ねる

「はむ、んく、んく、んく。」

「・・・メネ。」

「んく？」

「・・・あ、

口が空いてからでいい。」

「んく。」

「はあ、ケツコン・・・どう言うか。

「空いたよ。」

「おう、話があるんだけど。」

「んう？」

「つて、おい。」

「んんんうんおんん？」

（だっってお腹空いたし？）

「まあ、うん、そうなんだけどさ。」

成人している、つまり、

メネは15歳なのだ

あ、うん、帰ってからにしよう。

▽

ギルドに報告を済ませ

張り出されている依頼を見るが

討伐系統が少なく

“軍への協力依頼”が

張り出しボードの半分を埋めていた

「なさそうだな。」

「そだね。」

帰るかと思ひ振り向くと

「大変だっ!!」

東の国が攻めて来たぞっ!!」

「馬鹿なっ!?!」

このギルドは

東の国の依頼も

受けているんだぞっ!?!」

「それが、

西も南も、両方東の国から

攻められてるんだっ!!」

「なんだってっ!?!」

ギルドから飛び出し、

メネを抱きかかえ

大急ぎで森の隠れ家に向かう

「うゝ・・・くるしゝ。」

魔法世界でありがちな

“空を飛ぶ魔法”は

もろに空気抵抗、

高度の変化による息苦しさが

のしかかって来る。

「少し我慢してくれ。」

勿論、ちゃんとイメージをして

より明確にする為に“詠唱”も

使用すれば息苦しさもなんのその

だが、それ所では無い

「居たっ!!ミラムっ!!」

隠れ家に向かう途中で

同じく隠れ家に向かう

ミラムとリフラを見つけ、急降下する

「ミラム、リフラ、

この森から逃げるぞ！」

「っ!？」

イソロク、何処から

攻められてるの？」

「ミラムちゃんっ!？」

「東だ、

ギルドも臨戦態勢に入ってる。」

「無くは無い、けど

季節的におかしいわよ？」

この先は冬季、

川も凍り付く

極寒の季節が目前なのにつ!!」

「知るか、

隠れ家は残すが、

手に持てる保存食は持って

後は事前に決めてた洞窟を抜けて

〃海〃に逃げるしか無い。」

「イソロク、

どうして逃げなきゃいけないの？」

「メネ、

このギルド周辺の

北・南・東・西の国は、

気候の変動によって

〃肥沃な領地争いが激化するんだ〃

本格的な冬季が目前で

戦火を広げると言う事は

東の国の作物が不作か凶作、

食糧確保なのか、

春の雪解けの際に広がる

『豊富な養分を

含んだ土地欲しさ』か、

それに巻き込まれると言う事は

『戦争に深く関わらなきゃいけない』

つまり、どこかの国に

所属しなければいけない。」

「お母様を探す目標はっ!？」

「この冬は無理だ、

それに俺達は

『魔力無しでも定期的に納品出来る』

不思議なパーティーだと

有名になってしまった、

どの国も欲しがる人材に

ギルドが拒否をすれば

それこそ

『ギルドを一点集中攻撃する

口実が出来てしまう』」

「メネちゃん、

ホントは私が第一王女として

戦争を止められたら良かったんだけど

もう、それも出来ないの。」

「それに、ついさっき、

ミラムちゃんの西の国に行って来たの、

そして王様から直接聞いて来たの。」

『東の国がおかしくなって

北、南、西の国で連合を組んでも、

撃退が及第点だと』

「そんな・・・。」

「メネ、悪い。」

眠りの魔法を

そつとメネにかけ、眠らせる。

「急ごう、

ここにも、ギルドか、

それぞれの国の奴らが来るだろう。」

「ええ、

お父様は、

国に非常事態宣言をしたし、

私が残って戦うって選択を捨てて

《好きに生きなさい、

ただし、もう門前払いになる》って、

泣いて、抱きしめてくれたわ。」

「ミラムちゃん、

精霊・妖精達が騒ぎ出しているわ、

東からおかしな

「妖精・精霊が迫って来るって」

「行こう、

海には「既に艦隊を準備してある」